武蔵野日曜聖書講筵

ペテロの脱獄
――使徒行伝第12章――

１９９１年7月21日
小池辰雄

キリストに居る者　キリストに居る者　私ひとりのため　ヤコブの殉道　聖霊の熱心がなす
福音書は降参しながら読まなくては　聖霊の土台は十字架　御使のペテロ救出　聖霊の執成し
ヘロデの死　天道に即する路

【使徒12】

1その頃ヘロデ王、教会のうちの或人どもを苦しめんとて手を下し、2剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。3この事ユダヤ人の心に適いたるを見て、またペテロをも捕う、頃は除酵祭の時なりき。4すでに執りて獄に入れ、過越の後に民のまえに曳き出さんとの心構えにて、四人一組なる四組の兵卒に付してこれを守らせたり。5かくてペテロは獄のなかに囚われ、教会は熱心に彼のために神に祈りをなせり。6ヘロデこれを曳き出さんとする前の夜、ペテロは二つの鎖につながれ、二人の兵卒の間に眠り、番兵らは門口にいて獄を守りたるに、7視よ、主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内に輝く。御使かれの脇をたたき、覚していう。『疾く起きよ』かくて鎖その手より落ちたり。8御使いう、『帯をしめ、鞋をはけ』彼その如くしたれば、又いう、『上衣をまといて我に従え』9ペテロ出でて随いしが、御使のする事の真なるを知らず、幻影を見るならんと思う。10かくて第一・第二の警固を過ぎて町に入るところの鉄の門に到れば、門おのずから彼等のために開け、相共にいでて一つの街を過ぎしとき、直ちに御使はなれたり。11ペテロ我に反りて言う、『われ今まことに知る、主その使を遣わして、ヘロデの手およびユダヤの民の凡て思い設けし事より、我を救い出し給いしを』12斯く悟りてマルコと称うるヨハネの母マリヤの家に往きしが、其処には数多のもの集りて祈りいたり。13ペテロ門の戸を叩きたれば、ロダという婢女さきに出できたり、14ペテロの声なるを知りて、歓喜のあまり門を開けずして走り入り、ペテロの門の前に立てることを告げたれば、15彼ら『汝は気狂えり』と言う。然れどロダはそれなりと言い張る。かれら言う『それはペテロの御使ならん』16然るにペテロなお叩きてやまざれば、かれら門を開き之を見て驚けり。17かれ手をうごかして人々を鎮め、主の己を獄より導きいだし給いしことをつぶさに語り『こ

れをヤコブと兄弟たちとに告げよ』と言いて他の処に出で往けり。18夜明になりて、ペテロは如何にせしとて兵卒の中の騒ぎひとかたならず。19ヘロデこれを求むれども見出さず、遂に守卒をただして死罪を命じ、而してユダヤよりカイザリヤに下りて留まれり。

20さて、ヘロデ、ツロとシドンの人々を甚く怒りたれば、其の民ども心を一つにして彼の許にいたり、王の内侍の臣ブラストに取り入りて和諧を求む。かれらの地方は王の国より食品を得るに因りてなり。21ヘロデ定めたる日に及びて王の服を著け高座に坐して言を宣べたれば、22集民よばわりて『これ神の声なり、人の声にあらず』と言う。23ヘロデ神に栄光を帰せぬに因りて、主の使たちどころに彼を撃ちたれば、虫に噛まれて息絶えたり。

24かくて主の御言いよいよ増々ひろまる。

25バルナバ、サウロはその職務を果たし、マルコと称うるヨハネを伴いてエルサレムより帰れり。

●キリストに居る者

今日は前期の最終回で、使徒行伝の第12章、「ペテロの脱獄」という、妙な題ですけれども。秋からはパウロに入ります。ちょうど切りがよかったです。

私は、相手が日蓮宗であろうと禅宗であろうと浄土真宗であろうと、そこへ行けば、その気になれる。ということは、キリストは、そういうものを全部包摂するところの驚くべき霊の方で、そしてパウロが、

「律法の下にある者には律法の下にあるが如く」

と言った、その非常にパウロ的な自由が、私にはあるから。

「禅宗には十字架がない」

なんて、そんなことはない。あれは、聖道門ですからね、非常に自分を瞑想の上で鍛えるわけですから、浄土真宗の他力本願と、ちょうど対立するようなものです。いわゆる他力であろうと、自力であろうと、本当の世界にいくというと、相通ずるものがどこかであるんです。それが、ちゃんと分かるんですね、私には。我々の信仰のたちは、もちろん他力本願です。キリストの本願で生きていますから。

「クリスティアノス」

という言葉は面白い。キリストのことを

「クリストス」

というでしょ。これはギリシヤ語。油そそがれたる者。ヘブライ語は

「マーシアッハ」「メシア」

です。聖霊を授ける時に、香油を、オリーブの油を注ぐでしょ。それはひとつの徴だけれ

ども、それで聖霊が来るわけじゃない。その徴に過ぎない。聖霊を本当に降だすサムエルのような聖霊の器でなければ、本当は聖霊の儀式をやってはいけない。教会では、水のバプテスマは悔改めのバプテスマだから、それはそれでいいけれども。聖霊のバプテスマは、これはできる人は少ない。手島さんや私はやりますけれども。無教会にはいませんでした。内村鑑三といえども。

「～ティアン」というのはラテン語です。「クリスト」というのは、ヘブライ語のギリシヤ語訳。だから、もともとの意味はヘブライ語で、ギリシヤ語とラテン語と、この三つの要素からなっている言葉なんです、この「クリスティアノス」という言葉は。

「キリストに属する者、油そそがれたる者」

「キリスト」がとうとうその固有名詞になってしまったけれどもね。我々も「キリスト」なんです、「油そそがれたる者」である人は。「クリストス」なんですね。だけれども、キリストと一緒になっては大変だから、

「クリスティアノス」「キリストに属する者」「キリストにつける者」

という。

「我につけ、我に居れ」

という、あのヨハネ伝の15章。

「キリストに居る者」

というわけだ、「クリスティアノス」というのは。

●私ひとりのため

とかく問題を頭で解釈して、頭でそれが解決するような角度で福音に対するのはダメだ。もし神さまが頭で分かったらそれは神さまじゃない。それは、幼子の如く信頼してかからないとね。それも、親鸞が言っているとおり、信頼せしめられるんです。藤井先生は、

「信頼、信頼」

と仰ったけれども、我々は、信頼せしめられる。全部、受け身です。祈らされる――「祈る」んじゃない――十字架と聖霊に圧倒されるから、祈らざるを得ない。いろんな事にでっくわせば逆に力が来ると、私ははっきり言います。その力はもの凄いですから。こっち側から一生懸命で祈る祈りと違うんです、その凄さは。

K君が、私を

「雑巾みたいだ」

と言った。これは失礼でもなんでもない。雑巾なんだ。それは、十字架のあり難さが分かる時には、自分が本当にどん底に立つんです。人との比較じゃないですよ。だから親鸞の、

「この本願は自分一人のためだ」

と言った、この告白が本当にできるのが、本当の仏教者なんです。親鸞に限らない。これは、

「この福音は私ひとりのためだ」

ということを本当にあなた方が言えるならば、あなた方は本当のクリスチャンだ。いいかい。相対的な問題じゃないです。それでなければ、キリストの十字架も聖霊も、もの凄い力とはならない。私が何故こんな力があるかというと、その立場に立たせられているから。立っているんじゃないよ、立たしめられている。だから、私は、その事態をこの大詩篇でもっていろんな角度から告白せざるを得ない。大体百歳近くなったら、でき上がるでしょうけれども。使命のあるところは、必ず神さまは助け給う。ですから、どうぞ、皆さんも、一人一人が本当に使命ある存在ですから。ひとにどう思われようと、何と言われようと、そんな事は構やしない。私は弁護しません。そういう意味で、進んでください。そうしたらもぅ、一人一人がもの凄い存在となりますから。それでなければ、「福音」なんて言ってもね、アクセサリーじゃないんだから。

●ヤコブの殉道

それでは使徒行伝第12章。

1その頃ヘロデ王、教会のうちの或人どもを苦しめんとて手を下し、2剣をもてヨハネの兄弟ヤコブを殺せり。

「ヘロデ王」とはヘロデ大王の孫で、ヘロデ・アグリッパという、悪い奴なんだ、いわゆる権力者だから。

「ペテロ、ヨハネ、ヤコブ」と、よく言われているでしょ。山上の変貌の所でも、キリストと一緒に行ったのは、このペテロ、ヨハネ、ヤコブです。ところが、彼らは眠ってしまったね。これは、キリストの地上における三弟子です。ヨハネは例のパトモスに行って最後に黙示録を書かせられたヨハネです。ヤコブの方は兄さんで、ヨハネの方は弟です。このヤコブが殺されてしまった。だから、十二使徒のうちの最初の殉道者です。その前の、ステパノはいわゆる十二使徒じゃないからね。ペテロもパウロも最後には殉道の死を遂げますけれども。

だから、今のユダヤ人たちが本当に、

「パウロは本当だった」

と言って、クリスチャンになれば、エライ事になる。ところが、今のイスラエルの在り方を見ていると、やっぱり自我が強いね。

ヤコブを殺すと、ユダヤ人は喜ぶんだ。そうすると、今度は、ペテロも捕まえて、やっつけてしまおうというわけだ。

3この事ユダヤ人の心に適(かな)いたるを見て、またペテロをも捕う、頃は除酵祭(じょこう)の時なりき。

クリスチャンの親玉だからね、ペテロは。「過越」の祝いというのがあるでしょ、一週間。

その前の日が、この「除酵祭」という。ユダヤの暦でいうと、ニサンの月の14日という。

4すでに執りて獄に入れ、過越の後に民のまえに曳き出さんとの心構えにて、四人一組なる四組の兵卒に付してこれを守らせたり。

過越の時は遠慮している。16人の兵卒に守らせた。脱獄しないように。ペテロの脱獄は彼の力じゃないから。こんな脱獄は他にない。前にペテロは似た事をしたから、今度は間違いなくやっつけちゃえというわけなんだ。使徒行伝の5章19節に書いてある。

●聖霊の熱心がなす

5かくてペテロは獄のなかに囚われ、教会は熱心に彼のために神に祈りをなせり。

この「熱心に」というのは、ヘタすると間違う。熱心にでもいいけれども、人間的熱心ではダメなんです、「祈り」というものは。教会の人たちが、ペテロが捕まったと聞いたものだから、皆で一生懸命で祈った。キリストも、

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛せよ」

と。尽くして祈れ、というのと同じですけれども。この祈りは、やはり聖霊の力で祈らなければダメなんです。聖霊は私たちの中に内住する。

「主さま！」

といえば聖霊がやってくる。そうして、聖霊の力でもって祈るから、この祈りは必ずきかれる、敵をやっつけるという、確信ならざる確信が来るんです。ただ、いわゆる人間的な一生懸命ではダメですよ。「熱心」という言葉は、

「汝の熱心、これを為し給う」

という言葉があったでしょ、イザヤ書に。皆さん、そういうように本当に受けとっているかい。そうしたら、楽しいんです、祈っていて。キリストは全くその角度から祈っている。だから凄いんです。そして、もう神さまと一つになっているからね。

「癒えたり」

と言えば、もう、何キロか先の者が、その「癒えたり」というキリストの言葉と同時に癒えてしまう。大変なひとです、本当に。キリストの中に入らなければ、その質が出てこない。人間的な熱心で、いくものか。

いいですね。もう、私は、力が上から来て、しょうがないんだよ。ウソじゃないです。だから、集会したって、ちっとも疲れない。疲れないどころじゃない、後になるほど力が来てしまう。塚本先生が

「集会をして、月曜日はもぬけのからになる」

と言った。冗談じゃないよ。蓄電されてしまうんだ。蓄霊されてしまう。私は気違いかね、普通の気とは違うよ、確かに。天気なんだ、天気晴朗という。天の気なんだ。今日はお天

気がいいなぁと。毎日、天気がいいわ、外は雨が降ろうが。これから「天気」と書こうかな。このごろは「天弓」なんて書く。虹のことだよ。これは漢文の中にある。私は虹が好きだからね、ワーズワースじゃないけれども。

過ぎゆくものの中に、過ぎゆかざるものを見なければダメなんだ。

「過ぎゆくものは何とかにして……」

と、パウロは、はかないような事を言っているが、そうじゃない。ゲーテはやっぱり偉いね。

「あらゆる過ぎゆくものは、本質の映像たるのみ」

という。

神の熱心、キリストの熱心、聖霊の熱心がなす。その中に自分をぶち込む。そうしたら、その祈りは凄いことになる。私は、東寮（清瀬東京療養所）をお訪ねした頃に、その角度で祈ったら――聖霊に満ちていたからね――まだペニシリン以前の肺病の方々が治って病院を出ていってしまう。お医者さんがびっくりしてしまう。

●福音書は降参しながら読まなくては

6 **ヘロデこれを曳き出さんとする前の夜、ペテロは二つの鎖につながれ、二人の兵卒の間に眠り、番兵らは門口にいて獄を守りたるに、**

まぁ、厳重なんもんだ。

「兵卒のあいだに睡った」

とあるよ。大したもんだね、このペテロは。

福音書のペテロはダメなんだよな。嵐が来て、もう舟はひっくり返りそうになるとき、キリストは眠っている。あわてたペテロは、

「先生、ひっくり返るから、起きてください」

なんて。そしたらキリストに、

「信仰なきものよ」

とやられてしまった。キリストは、舟板を神さまの腕として眠っているんだからね。ひっくり返らない。大変なひとですよ。それで、

「鎮まれ！」

と言えば、嵐が鎮まってしまうんだからね。おとぎ話じゃないですよ、あれは。

だからもう、キリストの次元は、福音書は降参しながら読まなければダメなんだ。読めないんだ、降参しなかったら。

「こんな事があるだろうか？」

と頭で読んでいるうちは、いつまでたってもダメなんだ。

「頭じゃないぞ」

と。法然が言っている通りだ、『一枚起請文』でね。

どうですか、皆さん、楽になったですか。毎回、楽になってくださいよ。

これはキリストがヨハネ伝14章で似たようなことを言って居られる。

「25**これらのことは我なんじらと偕にありて語りしが、26助主（たすけぬし）、即ちわが名によりて父の遣（つかわ）したもう聖霊は、汝らに万（よろず）の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出ださしむべし。27われ平安を汝らに遺（のこ）す、わが平安を汝らに与う。**

「われ平安を汝らに遺す」

これが大事なんです。この訳はいい。これは「平和」ではダメだよ、「平安」だ。神さまとの関係が、力ある安らかさにあるのが、平安という。平安には力がある。

わが与うるは世の与うる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼（おそ）るな。28「**われ往きて汝らに来たるなり」と云いしを汝ら既に聞けり。**」（ヨハネ14・25～28）

聖霊としてやって来る。だから、

「私が天界に往くのを喜べ。私が天界にいかなければ、聖霊はやって来ないんだ」

と、はっきり言っているんだ、キリストは。

●聖霊の土台は十字架

即ち、十字架を通って天界に往くんですからね。贖罪しなければ、聖霊は与えない。はっきりしているんだ。パウロもその事を言っているけれども、はっきりは、そういう句では言わない。

「聖霊の土台は十字架だぞ」

という事は、はっきりパウロも言ってはいない。もちろん、パウロの言葉の構造はそうなっているけれども。それをはっきり言っているのは、おそらく、私じゃないですか。どこかにそういう文章があったら、教えてください。

人間小池は、「雑巾」でいいんだよ。雑巾が、もの凄く力を持っている。だから、

「福音はこの私のために、この私一人のためにキリストは十字架に懸かりたもうた」

と、親鸞の言葉を借りれば、そういうことになる。

ルターがその角度になった。それでルターはこの贖罪が分かった。スタウピッツが、

「この十字架の贖罪は貴方のためなんだよ」

とルターに言った。それで、ルターはびっくりした。贖罪を観念的に見ていたからね。宗教改革はそこから始まっているんだ。ルターの魂の転換から。

教育では、魂の転換はできない。だから、私は教育の時に、ただ教育ではダメだから、校長の話でも福音の角度から時々火花を散らしていた。相手が、分かろうが分からなかろうがいいんだよ。気合が大事なんだ。言葉で分かる世界じゃないんです。霊の響きの世界だから。

神さまに祈って平安をいただく。私は詩篇を書いた時に、一番先に第3篇を書いた。そこに出ている。

「[4]大声で、エホバに私はいつも呼ばわった。
そのとき彼は応え給うた、その聖山から。
[5]私は、寝た。眠った。目さめた。
エホバが私を支え給うからだ。」（詩篇3・4～5　私訳）

そういう訳です。

「寝た。眠った。目さめた。それはエホバが私を支えてくださったからだ。本当にエホバの支えにおいて眠れた」

と。グラッドストーンがそうなんです。どんな政治的な問題があっても、彼はひとたびベッドに入ると、もうキリストの中に入った。眠った。ただ、カアツウムでもって、ゴルドン将軍が――援軍が二日遅れたんだね――それで彼が仆れた。あの時だけは眠れなかった、と伝記に書いてある。

同じ英雄でも、ナポレオンは最後に福音を読んで、

「これは本じゃなかった、活物だった。参りました」

と、ナポレオンは最後にセントヘレナでキリストの前に降参した。あれは天界に行ったね。

「汝、今日、われと共にパラダイス」

と。ヒットラーやスターリンなんていう奴は、ダンテに言わせれば、地獄のどん底だろうな。救いの確かさというものを、自分の信仰の度合いでもって考えたら、確かさなんて絶対に来ないです、ああ、自分の信仰なんてのは。

「私は大分、信仰が深くなったから、これで救われると思います」

と、何を言っているか。自分の側の信仰の深浅なんて、そんなことを問題にしているうちはダメなんだ。

「絶信せよ、上から信がやって来るぞ」

と。それが本当の確かさだ。私の言葉はちょっと、逆説的に烈しい言葉を使うから、よく躓かれるんだよな。仕方がない。

●御使のペテロ救出

そうしたらば、

[7]視よ、主の使ペテロの傍らに立ちて、光明室内に輝く。

大変なもんだ。この前、親鸞の話をしましたね。軒下で眠っていたら、親鸞の身辺に光がさしていた。親鸞を屋に入れるのを断った婆さんが驚いてしまって、そこで跪いてしまった。

御使かれの脇をたたき、覚していう。『疾く起きよ』かくて鎖その手より落ちたり。

これは大変なもんだ。鎖は、切ろうたって切れないものですよ、それが落ちてしまった。

8御使いう、『帯をしめ、鞋をはけ』彼その如くしたれば、又いう、『上衣をまといて我に従え』9ペテロ出でて随いしが、御使のする事の真なるを知らず、幻影を見るならんと思う。

「まぼろしを見るならん。これはちょっと自分がおかしいんじゃないか」と。本当に彼のあるがままの気持をここに書いてあるのが、非常にいいところだね。

「幻かな、これ、変だな」

なんて。

10かくて第一・第二の警固を過ぎて町に入るところの鉄の門に到れば、門おのずから彼等のために開け、相共にいでて一つの街を過ぎしとき、直ちに御使はなれたり。

もうこれで大丈夫だ、というわけで、御使が離れてしまった。

「門おのずから」

という言葉がありますね。これは正に、オートマティックという字なんです。「オートマテー」というんです、ギリシヤ語は。英語のオートマチック、ドイツ語のオートマテッシュという字は、このギリシヤ語からきている。「アウトス」という字は、「己れ」「自ら」「自然に」という字ですから。

11ペテロ我に反りて言う、『われ今まことに知る、主その使を遣わして、ヘロデの手およびユダヤの民の凡て思い設けし事より、我を救い出し給いしを』

やっと、本当にこの救いが分かったと。いやぁ、大変なもんだ。それは思いもよらないことだからね。これほど不思議なことは滅多にないでしょうけれども、とにかく、とても思いもよらないように助かることがあるですよね。経験した人もあるでしょ。

まぁ、人間の世の中は殺人、いろんな争い。もう、しょうがないね、この人類の歴史は。滅びに向かっている。「東西南北はない」と坊さんが言っているとおり。東西南北ないところの、本当にまん丸い地球だから、みんな丸くなれ、なぜ角ばるかと。天体が地球を現しているじゃないか。四角い天体がどこにあるか。四角い車輪はどこにあるか。車はみな丸いから動く。人間も丸くならなければダメなんだ、お互いに。それが、角突き合わせてね、牛の喧嘩みたいなことして。全くしょがないものだね、人というものは。まぁ、特に男はね。

こうやって助けられた。ということは、ペテロには本当に福音のための使命がある、まだ。

●聖霊の執成し

12斯く悟りてマルコと称うるヨハネの母マリヤの家に往きしが、其処には数多のもの集りて祈りいたり。

この「マリヤの家」が祈りの中心だったらしいね。ペンテコステの時にもそうでしょ。「マ

ルコと称うるヨハネ」と、面白いことを言っているね。その当時は、ローマでしょ。だから、ローマン的な名前なんです、このマルコというのは。

13ペテロ門の戸を叩きたれば、ロダという婢女(はしため)さきに出できたり、14ペテロの声なるを知りて、歓喜(よろこび)のあまり門を開けずして走り入り、ペテロの門の前に立てることを告げたれば、15彼ら『汝は気狂えり』と言う。然れどロダはそれなりと言い張る。かれら言う『それはペテロの御使ならん』16然るにペテロなお叩きてやまざれば、かれら門を開き之を見て驚けり。17かれ手をうごかして人々を鎮(しず)め、主の己を獄(ひとや)より導きいだし給いしことをつぶさに語り『これをヤコブと兄弟たちとに告げよ』と言いて他の処に出で往けり。

やっぱり助かっていたのかと。それは、本当の祈りならば、祈りがきかれたと言って、いきなり喜ぶはずなんだ。彼らの「熱心さ」がどれだけの熱心だか知らないけれども、とにかく、しかし、聖霊は執成(とりな)してくださったわけだな

このヤコブは、キリストの弟のヤコブです。エルサレムの教会の主役を勤めていた。初めは、このヤコブはなかなかキリストを受けとらなかったんだ。キリストが十字架に懸かって天界に行ってから、やっと目が覚めた。まぁそんなもんだよな。肉的に近い人ほど難しいんだよな。家族の人たちを本当に救いの世界に入れるのは難しい。これは、神さまが、何かの機会にそれを呼ばない限り、いわゆるお説教じゃダメなんです。

「聖書を読め」

と言ったってダメなんです。

私は中学生の時に――私の兄貴が内村先生のキリスト教だよな――私は

「間違ってもヤソ教には」

なんて思っていたからね、冗談じゃないよ。これは、兄貴が仆れて、内村先生の『宗教と現世』という本を読んで、これで私は捕らえられた。そういうことかと。

●ヘロデの死

18夜明になりて、ペテロは如何にせしとて兵卒の中の騒ぎひとかたならず。19ヘロデこれを求むれども見出さず、遂に守卒(しゅそつ)をただして死罪を命じ、而してユダヤよりカイザリヤに下りて留まれり。

カイザリヤまで行ってしまった。カイザリヤにローマの総督がいるんだよな。そこへ行って、また自分の勢力を挽回しようと思ったんだ。

20さて、ヘロデ、ツロとシドンの人々を甚(いた)く怒りたれば、其の民ども心を一つにして彼の許にいたり、王の内侍(ないじ)の臣ブラストに取り入りて和諧(やわらぎ)を求む。かれらの地方は王の国より食品を得るに因りてなり。21ヘロデ定めたる日に及びて王の服を著(つ)け高座に坐して言を宣(の)べたれば、22集民よばわりて『これ

神の声なり、人の声にあらず』と言う。

冗談じゃないよ、これは、とんでもない。白きサタンの声なんだ。それを

「神の声なり、人の声にあらず」

と、おべっか使っているんだ。

23 **ヘロデ神に栄光を帰せぬに因りて、主の使たちどころに彼を撃ちたれば、虫に噛まれて息絶えたり。**

「冗談じゃない、私は人間だ」

と言えばいいのに。どういう虫だかね。なんか、腹に毒が入って、

「非常な激痛だった」

ということを、ヨセフスという人が書いているそうだ。

●天道に即する路

24 **かくて主の御言いよいよ増々ひろまる。**

25 **バルナバ、サウロはその職務を果たし、マルコと称うるヨハネを伴いて エルサレムより帰れり。**

バルナバはアンテオケにやって来たから、クリスチャンです。パウロを「是非に」と言って、呼んだ人です。クプロ島の人です。「バルナバ」というのは「慰めの子」という意味だ。

我々は本当に平伏して、この御霊の中に入れば、不思議な事が起きる。また、人のために、その角度から祈ってあげれば、力が及ぶ。瞑想してね、その人のいる所に、自分が魂で行って、その現場を瞑想しながら祈る。とにかく、祈りの世界は時空を越えるからね。それはもう、大変なものだ、霊の世界は。霊の動きというのは、霊波でもって……。

何でも人まねはいかん。その人、その人で特別なことですから。だから、それが、神さまに導かれる、「道」ではなくて、「路」なんです。一人一人の路は、真似ができない。これが、「天道に即するか」ということ。天道に即するならばこの路は助けられる。こういうわけです。

「我は道なり」

という、キリストの道。

「お前の路はいつわりのない路ならば、助けてやるぞ」

と。

「汝、今日、我と共にパラダイスなり」

というのが、極限的な助けです。散々悪い事をした奴が、最後の瞬間に、キリストと一緒に天界に行ってしまったんだから。ひとがどうだこうだと、そんな事を言っている人は、結局、自分がダメになるんです。いいですね。それでは、これでおしまい。